〈翻訳〉

モーリス・アルヴァックス
『聖地における福音書の伝説地誌』序論

横山寿世理*・金瑛**・柳田洋夫***

抄　録

フランス社会学者モーリス・アルヴァックスの『聖地における福音書の伝説地誌：集合的記憶研究』の序論をここに邦訳する。本書は，聖地パレスチナについての集合的記憶の枠組みが，キリスト教集団において共有されてきたことを実証する研究であった。新約聖書に始まり，数々の文学作品や伝承における聖地の記述がそれぞれ少しずつ異なっても，聖地パレスチナにおいて聖地を特定することで生じる空間的枠組みはほぼ共通していることを示している。

膨大なアルヴァックスの著作に反して，日本では，邦訳された著作が非常に少ない。本翻訳はその一部に過ぎないが，その邦訳作業の一端になることを目指す。

キーワード：アルヴァックス，集合的記憶，聖地，福音書，伝説地誌

訳者解題

1945 年終戦直前のブーヘンヴァルト収容所において 68 年の生涯を閉じることになったフランスの社会学者モーリス・アルヴァックスの著作の一部をここに訳出する。本稿は『聖地における福音書の伝説地誌：集合的記憶研究』*La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte: Étude de mémoire collective*〔PUF，1941 年〕の序論を翻訳したものである。他者の記憶を頼りにしながら過去を再構成するという「集合的記憶」の概念を明確にしたのが『記憶の社会的枠組み』と遺稿である『集合的記憶』〔1950 年〕であり，これら二冊の合間の 1941 年に公刊された本書はアルヴァックス自身による集合的記憶の経験的・実証的研究と位置づけられるだろう。

アルヴァックスのブーヘンヴァルト収容所での不幸な最期は，死臭の中での寂しいものであったことが，センプルン『ブーヘンヴァルトの日曜日』[1] から窺える。そのような最期となれば，アル

*人文学部・日本文化学科
**関西大学・社会学部非常勤講師
***人文学部・日本文化学科／児童学科

論文受理日 2021 年 6 月 30 日

ヴァックスがユダヤ人であるようにも思われ，日本ではユダヤ人と紹介されることもあったが，妻イヴォンヌがユダヤ人ではあるものの，モーリス・アルヴァックス自身はランス出身のキリスト教徒である[2]。

「集合的記憶」の提唱で知られるアルヴァックスだが，その社会学的な著作は膨大にある。ライプニッツ論，集合心理学，自殺論，階級論，統計学など多岐にわたる。ベルクソン哲学を批判して，デュルケーム学派に位置づけられるアルヴァックスだが，2007年に没したブルデューへの影響を指摘する研究者もいる。アルヴァックス社会学の広がりを指摘できる一方で，その邦訳書といえば，清水義弘訳『社会階級の心理学』〔誠信書房，1958年〕，小関藤一郎訳『集合的記憶』〔行路社，1989年〕，板倉達文訳『労働者階級と生活水準』〔名古屋大学大学院環境学研究科，2013年，https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/16687#/.YNhfgC33Jqt, 2021年6月8日確認〕，鈴木智之訳『記憶の社会的枠組み』〔青弓社，2018年〕の4冊に過ぎない。本稿は，これらのアルヴァックスの著作翻訳に続く試みになるはずである。

この『聖地における福音書の伝説地誌』には，アルヴァックス自身の5日間の現地調査も反映されたと言われている[3]。この著作は，諸々の文学作品や新約聖書の共観福音書と「ヨハネによる福音書」とのあいだでイエスやキリスト教徒の歩みが少しずつ異なって描かれたとしても，巡礼先となるような「聖なる場所」が，おおよそ類似の場所や空間の枠組みを持っていることを示した研究である。また，その枠組みは，キリスト教集団が信念もしくは信仰に関する記憶を「流れ」〔courants〕として共有することを示すことになる。つまり，歴史の中で，次第に「聖なる場所」が，キリスト教信仰を集合的記憶として顕在化させることになると論じられている。その論述の中で，新約聖書や文学に限らず，本稿においても確認できる，エルサレムに関する地誌学・考古学研究もこの集合的記憶を形成する一つの要素として取り入れられている。したがって，『聖地における福音書の伝説地誌』は，アルヴァックス自身がエルサレムに関する集合的記憶を客観的に実証する試みであると言える。

また，本書はルイス・コーザーによる英訳で知られているが，これは結論のみであり，今回本稿に掲載する序論については訳出されていない[4]。さらに，ドイツ語訳とスペイン語訳の存在も確認できている。

本書『聖地における福音書の伝説地誌』の構成を記しておきたい。

序　論

第1章　ボルドーの巡礼者

第2章　ベツレヘム

第3章　《二階の広間》とダビデ廟[5]

第4章　ピラトの官邸

第5章　十字架の道行き[6]

第6章　オリーブ山

第7章　ナザレ

第8章　ティベリアス湖

結　論

最後に翻訳の分担について記しておきたい。初めに柳田と横山がフランス語からの邦訳原稿を作り，これを数年の後に金と横山で修正して，この原稿を完成させた。フランス語からキリスト教信仰や聖書に関わる用語を訳し起こさなければならず，ラインホールド・ニーバーによる著作の翻訳で定評のある柳田の力が，この翻訳を進めてくれた。訳註については金が執筆した。また，投稿に際して，関西学院大学の松本隆志氏には邦訳を丁寧に確認していただき，修正の提案をいただいた。お名前を記して，感謝したい。

今後は，すでに下訳を始めている結論を訳し終えて，その他の章の翻訳にあたりたい。訳者それぞれが，それぞれの知見を生かして完成させた訳稿になるが，今後訳し続ける中で多くの方からのご助言をいただきたい。また，本稿が今後のアルヴァックス研究に貢献するための一歩となることを祈りたい。

〔横山寿世理〕

訳者解題註

〔1〕 ホルヘ・センプルン，宇京頼三訳『ブーヘンヴァルトの日曜日』紀伊國屋書店，1995年，28–36頁。

〔2〕 Becker, Annette, *Maurice Halbwachs: un intellectuel en guerres mondiales 1914–1945*, Agnès Viénot Éditions, 2003, p. 24.

〔3〕 *ibid*., pp. 276–281.

〔4〕 Halbwachs, Maurice, *On Collective Memory (Cosey, L. A. ED. &Trans.)*, The University of Chicago Press, 1992, pp. 191–235.

〔5〕《二階の広間》〔ルカ　22:12〕は「最後の晩餐」が行われた場所のこと。新共同訳『聖書』に従った。

〔6〕「ヴィア・ドロローザ」〔苦難の道〕のこと。『オックスフォード　キリスト教辞典』〔教文館，2017年〕の訳を参照した。

凡例

・（　）はアルヴァックス自身による補足と原註を示し，〔　〕は訳者らによる補足や注釈と訳者註である。

・……は中略を示す。――は読みやすさを考慮し，省略もしくは追加している。

・アルヴァックスが引用した著作に邦訳がある場合は，これから引用を行い，邦訳書の情報を併記した。

序　論

聖地パレスチナへの旅は，通常とはかなり異なる精神状態においてなされているだろう。それは多くの場合「巡礼」であるからだ。巡礼者たちは聖なる遺跡〔emplacements consacrés〕において黙想し祈るために，福音書に記されている出来事が生じた場所〔lieux〕を訪ねることを望んでいる。巡礼者たち以前に，これらの場所の記憶〔souvenir〕[7] を保持してきたのは，キリスト教徒たちである。過去何世紀にもわたって，敬虔な人々は，聖域の周りにひしめき合っていた。これらの聖域は，いくつかの最も重要な地点，すなわちキリスト教徒の記憶〔mémoire chrétienne〕に最も強く焼きついた地点に築かれている。これらの記憶が特定の場所に置かれた日から，それらの場所が記憶を変容させた。ありふれた歴史的事実ではなく，超自然的な出来事が問題になるだけに，いっそう記憶は変容させられるのである。それらの超自然的な出来事が置き直される現地の枠組みには超自然的な部分もある。さらに，感知できる外観の向こう側に，別の世界〔超自然的な世界〕を捉えたと確信しうるのは，信仰の眼によってである。そしてその世界は，もはや空間内にはまったく存在しておらず，キリスト教徒にとってのみ真実として存在している。

また，別の要求を持つ信仰者が存在することも事実である。その者たちは，伝承によって聖化された場所〔endroits〕に他の人たちと連れ立って出かけるだけでは満足しない。いったい，この伝承というもの，場所にまつわる伝承となどというものは，確かなものなのだろうか。彼らが望むのは，キリストの歩みに関わる真正な痕跡を探し出すことである。まさにここで，キリストが特定の語りや特定の身振りを行い，さらに，人間としての生が営まれたということを，彼らは確信したいのである。物語としてそれまで聞かされていたものと，その物語が呼び起こす場所の現実とを比較してみると，どうやら彼らはおそらく，自らの信仰〔croyances〕がよみがえり，信仰において強められることを期待しているのだろう。したがって，真正性〔authenticité〕についての問いが前景化する。では，これまでされてきた場所の特定〔localisation〕[8] は，〔真正性についての〕批判に耐えられるのだろうか。「というわけでそれは事実だったのだ」というのは，はっきりとわかる証拠〔témoignage〕のごときものであり，その他の人々にもはっきりわかる確証を与えるがゆえに，おそらくはいっそう決定的なのである。そうである時，過去の一部は現在となる。すなわち，人は過去に触れ，過去と直接的に接触している。

まったく別の視点に立ってみよう。次のような一連の問いがある。イエスは神であり，超自然的存在だったのか，あるいは単に自らを神もしくは神の子だと信じていただけの人間だったのか。イエスは存在していたのか。福音書には何らかの歴史的根拠があるのか。だが，これらの問いに与する必要はない。サント＝ブーヴは『イエスの生涯』についての論考〔《Vie de Jésus, par M. E. Renan》〕の中で，この本に向けられてきた批判のとげとげしさに驚き，おおよそ次のようなこと

を言う[9]。「少しだけ待ってほしい。ほどなくして，厳格で妥協を許さず一貫した新人類が到来し，仮借なき批判と否認を超え出るだろう。その時，あなた方はルナン氏のことを惜しむようになるだろう」。もう一度繰り返すと，この手の議論とは距離を置いておくことにする。私たちが福音書に記されている事実についての場所を特定する〔localisation〕ようになったのは，かなり遅い時期〔イエスが誕生した時代からかなり経過した時期〕，すなわち 4 世紀初めに他ならないからである。聖なる場所〔lieux saints〕と呼ばれるものに関するこれらの伝承〔traditions〕は，どのようにして形成されたのであろうか。その伝承の起源はどのようなものなのだろうか。その点について，私たちを思わぬところへ連れて行き，かなり昔へと遡らせて，その上，まったく真実味を欠くというわけではない推測をするのも自由である。重要なのは，これらの伝承が存在するのは，私たちがそれらの伝承に到達している時だということである。私は，伝承の背後にあるものを探究することはしないし，それらの伝承が真正なものであるかどうかも問わない。そうではなくて，私はその伝承自体を集合的信念〔croyances collectives〕[10] として研究してきた。私は集合的信念の力〔force〕と広がりを見出すことを試みる。さて，私がこれらの集合的信念の跡をたどるのは，特にこの時期〔4 世紀〕からである。すなわち，モニュメント（その中でも特に巡礼者たちが描写しているもの）が，集合的信念の跡をたどるのを許してくれる範囲においてである。多くの観点から見て格別に重要なこの事例に関して，私が問題としているのは，集合的記憶〔mémoire collective〕が従っている法則のいくつかを発見することである。

私たちが取り組んでいる主題を扱う文学は，相当な数にのぼる。4 世紀から現在に至るまで継承されてきた，巡礼者や旅行者の物語が存在するからである。私はそれらの物語を大量に読んできたのだが，その中でも最も古いものは，パウル・ガイヤー（『エルサレムの旅行福音祈祷 4–8 世紀』，1898 年）とティトゥス・トブラー（『聖なる地をめぐる叙事文 8・9・12・15 世紀』1874 年）が作成した校訂選集の中の，ラテン語で書かれた物語である。他の様々な古典と同じく，多くの人々が熱心にこれらの古い著作の考証を行ってきた。〔巡礼者や旅行者について書かれた古い著作については，〕写本が比較校訂・分類され，異本が発見され，比較照合や，この上なく詳細な地理的・歴史的説明が積み重ねられてきた。

それぞれの時代において，聖なる場所に関する伝承の総体を，その多様性と変化も含めて直接的に把握することを可能にしてくれるのは，まさに厳密な意味での証言〔témoignages〕なのである。〔証言を受けて書かれた〕これらの著作の作者たちは，自分が見聞したことを伝えたまでのことである。彼らは議論したわけでも，個人的な意見を述べたわけでもなく，また，疑念や留保を示したわけでもない。彼らが書いた証言がいっそう貴重なのは，それらがひとえに，彼らの個人的見解などではなく，信徒集団における，ありのままで生き生きとした信念だからである。彼ら以前に信じられていたかもしれないことや，彼らが知らないか忘れてしまったことに関して，まったく熟慮が行われていないのである。それゆえ，宗教的な性向〔instinct religieux〕——あらゆる合理的ない

し科学的な規律から解放された集団における，宗教的な想像力に対するいくつかの欲求――とは別の動機がなくても，伝承の自然発生的展開をたどることができるし，いくつかの場合においては，時間を越えた伝承の自然な継続をたどることもできるのだ。

〔証言を書き残した〕作者たちの多くは，名前がわかっていない。名前が知られていて，その伝記が書かれうるような大物たちでさえ，自らの個性を消し去ったかのように見える。その幾人かはより正確で，洗練されたラテン語で，まったくもって的確で明瞭に書き記している。彼らは，宗教や聖書〔les textes sacrés〕にもいっそうよく通じている。それでもやはり，彼らは民衆の一部のごとき者たちである。私たちに伝わってくるのは修道院における会話や，巡礼者たちが集う食堂でなされねばならない発話の残響である。それらの残響は，教会や礼拝堂，礼拝行列や聖化された場所〔lieux〕への訪問の中でなされる儀式の間にも存在している。〔物語を〕見せて説明している人々と，それを眺めて聞いている人々における精神状態は，同じものである。同じ水準のことが共有されているのだ。確かに，驚くほど無味乾燥で，きわめて短くて内容も粗末な物語が存在する。それらの物語において見つかるのはせいぜい，場所や人物についての名前――時には連祷のようにリズムを持つことはあるが，辞書の項目のように単調な名前――の連続だけである。だが，豊かな展開や飾り立てられた描写，多くの詳細を含んだ物語も存在する。重要な証言には，一連の伝説〔légendes〕，すなわちあらゆる民間伝承が付け加わる。これらの民間伝承で対象になっているのは，旧約聖書や新約聖書，文字どおり地域的な伝承，つい最近に流入・出現したもの〔外部から伝えられてきたものや，内部で急に伝承され始めたもの〕，さらには太古ないし異国の珍しいものなどである。繰り返し，矛盾，難解さ，単純さ，時には空虚な中身にうんざりしていないで辛抱強く読むならば，多くのことをそれらの伝説から読みとることができるはずである。これらの伝説から生じる思考と信念の流れ〔courants〕[11] においては，これらの多様なものすべてが混ざり合っている。私が知りたいのはまさに，これらの流れなのである。

作者たちが重要だと考える最終目的がどのようなものであれ，事実と場所についての根拠ある歴史的知識に依拠しようとした学術研究も存在している。その科学的方法は，ランソン〔ギュスターヴ・ランソン，1857–1934年。フランスの文学史家，評論家〕とその学派がそれを文学作品に適用しようとした時，人々から手厳しく批判されたものである。にもかかわらず，聖書を最も尊重するキリスト教徒たちは，この方法をこの領域〔文学〕にためらうことなく移しいれたのである。エルサレムのドミニコ会〔1890年設立のエルサレム・フランス聖書考古学学院〕は見事にこの務めを成し遂げた。ドミニコ会士PP. ユーグ・ヴァンサンとF-M. アベルによる『エルサレム――地誌学・考古学・歴史学的探究』[1] は，伝承や，何世紀もの間にあらゆる国であらゆる言語で書かれてきた写本・印刷本が，聖なる場所〔lieux saints〕の歴史について私たちに教えうるすべてについての「大全」である。聖なる場所の歴史に付け加えられるのは，その場所に建てられたモニュメントや教会，大聖堂について熱心になされた研究，地誌的・考古学的・芸術的な研究，さらには地質学的な研究

（そこでは，あらゆる地層，気候変動や地震の痕跡が探究されてきた）である。聖なる場所の歴史が明らかにされ，明白になるためには，こうした研究が比較の対象となるのだ。この研究にはまた，引用や再現がふんだんにある。ここで重要なのは，客観性について絶えず配慮されているということである。「（教父たちの言うような）無分別な護教家や無知な誹謗者ならばやりかねないのだが，中庸な精神を持つすべての人にとって明白なことは，教会は決して，聖域への信念〔croyance〕を生み出さなかったということである。たとえこの聖域が，たとえば聖墓〔キリストの墓〕やカルバリの丘〔キリスト磔刑の地〕のように最も卓越し伝統的なものであり，キリスト教徒の正統派からすれば〔そこに訪れることが〕義務であったとしてもである」。すなわち，信仰〔foi〕に由来する福音書内の出来事については，まったく場所を特定できなかったのである。それゆえ，作者たち〔ヴァンサンとアベル〕は，十分に自由な思索でもって研究を突き詰め，自分たちの検証や解釈や仮説を提示できたのである。

この著作〔『エルサレム』〕さえあれば，先行文献を読むに及ばない，などと言いたいのではない。だがこの著作は，その内容の最上の部分を私たちに示しているし，批判的な議論・探究・発掘（中でもアメリカ人たちによって最近なされたもの）の内で紛れもなく最新のものである。アベルとヴァンサン（以下，「ヴァンサン」と略記）がかなり頻繁に案内役とした〔先行文献の〕豊かな成果を，私も広く活用してきた。もし，私がしばしば彼ら以外の見解を採ったとしても，それは決して，彼らの視点に身を置いてその言い分を理解しようとする努力を怠ったということではない。

私はまた，まったく趣の異なる著作にも多くを負っている。グスタフ・ダルマンの『イエスの道程――福音書の地誌学』である。ダルマンはグライフスヴァルト大学の教授であり，エルサレム・ドイツ考古学研究所所長である。また，彼はルター派であり，モラヴィア兄弟団〔ドイツの貴族ツィンツェンドルフの保護により18世紀前半にヘルンフートで結成された敬虔主義的共同体〕とも関係がある。さらに，彼は長い間パレスチナに滞在し，数多くの実地調査を行った。彼は，「神がイエスに運命づけ，歴史がイエスに与えたところの民衆や土着の風土〔milieu local〕の中」[(2)] にイエスを置き直し，イエスがまさにその土地を歩んだ痕跡を見出そうとしていた。確かに，伝承は助けになる。そして，エルサレムだけではなく，福音書でキリストの姿が示されている場所（ベツレヘム，ナザレ，ティベリアヌス湖畔など）ならどこでも，ダルマンは多くの伝承を示している。また彼は，イエスの旅――まずイエス誕生前後のベツレヘムから始まり，ヨルダン川沿岸，砂漠，ガリラヤからユダ，エリコからエルサレムへと至る旅――に関係するあらゆる伝承を書き留めた。だがとりわけ，ダルマンがそれらの場所と関連づけているのは，〔それらの場所を〕喚起・想起するための別の多くの手がかりや手段である。ここでの手がかりや手段とは，キリストの生，歩み，布教，死に関する枠組み〔cadre〕を復元することが可能なすべてのもの――ユダヤ律法，儀礼的な実践，時間の単位，農業，商業，生産物，度量衡，物価，税金など――であり，これらをダルマンはそれらの場所と関連づけている。さらに，気候，季節，動物相，多様な植物相，野の花の様相，乾燥し

た高地といった，おそらくは二千年前からまったく変わっていないもの，そして，イエスと彼の最初の弟子たちの人物像と切り離せないものすべてを加えておこう。そして最後に，言語，旧約聖書と新約聖書の原文，ヘブライ語の語彙と文法，アラム語の方言，地方の名前や専門用語，語源，類似関係も加えておこう。なぜなら，ダルマンは神学者であると同時に，セム語を専門とする言語学者でもあるからだ。

確かにこれらすべては，巡礼者の物語――ある世紀から別の世紀にかけて，エルサレムの聖職者たちが訪問者たちに伝えてきたこと――の域を超えている。また，これらの伝説の中には変化が挿入されているのだが，それは起源にあるものへの回帰，すなわち歴史的な正確さを目指す努力によるものではない。反対に，それはおそらくこれらの伝説が，福音書を書いた人々のあらゆるケースにおいて，イエスのものでありえた風土〔milieu〕[12] や枠組み〔cadre〕からますます遠ざかって，それらから自由になったためである。上記のような考え方とは異なり，私たちはダルマンのおかげで，こうした環境〔entourage〕や景観〔décor〕とより一層の緊密な関わり合いを取り戻すことになる。というのも，これらは一度失われたにもかかわらず，多くの知恵や学識によって復元されているからである。〔ダルマンの〕著作は緻密で内容も盛りだくさんであるが，〔その描写は〕生き生きとしている。それゆえ，後にわかるように，私はそこから多くのことを引き出せたのである。

本書の註では，他の著作についてあらゆる有用な書誌情報を示したが，それらはヴァンサンとアベルの著作の中にも見つかるだろう[3]。また，これら 2 冊の本を強調したのは，パレスチナの聖なる場所をめぐる問題に関する知識の中で最も広範で現代に合った描写を，これらの本が私たちに提示してくれるからである。本書では絶えずこれらの本から借用し，文字どおり長々と引用していることがわかるだろう。なぜなら，これらの本が，もともとのテクストや文書記録，モニュメントの間に中途半端なものを増やすことを避けているからである。さらに，それらを正確な形で読者に対して提示することが，誠実なことだからである。そもそも，優れた職人たちによって仕上げられた仕事をやり直したとして，それが何になるだろうか。本書の努力は，別のところに向けられている。

この観点からすれば確かに，初期の伝承の状態や発展は，私たちにとって闇に包まれたままである。エルサレムのキリスト教共同体の存続において，連続性は存在しなかったと言われてきた。なぜなら，ローマ人による攻囲以前の 66 年に，キリスト教共同体はエルサレムを離れ，彼らがそこに近づくことは長いこと禁止されてきたからである。とりわけ，ハドリアヌス帝によってエルサレムがローマの植民地に変えられてしまうという動乱の極みにおいて，モニュメントの最後の痕跡にいたるまでが消し去られ，風景がまったく見違えるほどに変わることを余儀なくされたため，それらについて記憶する力〔mémoire〕が長い間失われていた，と言われてきたのである。このことについて，ルナンはすでに以下のような反論をしている。「紀元 70 年の後は，エルサレムは積み上げられた瓦礫の山でしかなかった。プリニウスはエルサレムをあたかも消滅したかのように語る。しかしながら，そこに留まっていたのは，わずかな老人と女性たちだけだった。フレテンシス第十軍

団は，見捨てられた都市の片隅に駐留し続けた。おそらく，まだ見えている神殿の基礎部分を人目を忍んで訪問することは，金銭と引き換えに兵士たちによって黙認ないし許可されていた〔これはハラムエシュ・シェリフと呼ばれた，残された神殿の土台部分のことである〕。特にキリスト教徒たちは，いくつかの場所〔lieux〕の記憶や，それらへの信仰〔culte〕を持ち続けていた。エルサレムとその付近の再建がなされなかったがゆえに，巨大な建造物の膨大な瓦礫がその場所に手つかずの状態で残された。その結果，あらゆるモニュメントが依然として完全に識別できたのである」[(4)]。

このような見方はあり得るだろう。だが残念なことに，これらの仮説の中に，ルナンは個人的な判断をあまりに強く盛り込んでしまっている。もっとも，ルナンの仮説を検証するには及ばない。聖なる場所に関する伝承が正確かどうか，それらが昔の事実と合致しているかどうかを，探究しているわけではないからだ。伝承が出現した時から，確立された伝承が取り上げられ，続く何世紀ものあいだ研究されてきた。私が考えているように，集合的記憶〔mémoire collective〕が主として過去の再構成〔reconstruction du passé〕であり，昔の事実についてのイメージを，現在の信念や精神的欲求に適合させているのだとしよう。その場合，そもそもの始めに存在していたものについて知ることは，まったく無駄ではないが二次的になる。従わざるを得ない不変のモデルとして，もはや過去のリアリティ〔réalité du passé〕は存在してはいないからである。その射程や重要性が〔個人に〕内在するものであったとしても，私が研究している経験というのは，私からすれば集合心理学〔psychologie collective〕[(13)]の経験に他ならない。また，私がその経験から引き出しうる法則〔loi〕は，別の事実についてなされた同種の調査によって確認され明確化されねばならないだろう。

原註

(1) Tome premier: *Jérusalem antique*, par H. VINCENT, 1912; tome second: *Jérusalem nouvelle*, par VINCENT et ABEL; fasc. I et II, Ælia Capitolina, le Saint-Sépulcre et le mont des Oliviers, p. 1 à 420, 1914; fasc. III, la Sainte-Sion et les Sanctuaires de second ordre, pp. 421–668 (et I–XXXI), 1922; fasc. IV, les Sanctuaires de second ordre (fin), pp. 669–1035, p. 1926; avec planches: I–XC; in–4°, Paris.

(2) Gustave DALMAN, *Les itinéraires de Jésus. Topographie des évangiles*, édition revue et complétée par l'auteur. Traduction française par Jacques MARTY. Avec 46 figures et plans. Paris, 520 p. in–8° (traduit sur le 3e édition allemande qui est de 1924).

(3) この本の最後で見つかるパレスチナの地図や現代のエルサレムの図面〔ヴァンサンやアルヴァックスが生きた20世紀前半の図面〕の目的は，読者にいくつかの指標を与えることに他ならない。アベルとヴァンサンの著作内で複写されたエルサレムの図面は，参照する価値がある。特に第86版での，古代ローマ王朝の時代のエルサレムと，12世紀のエルサレムはそうである（そこでは，聖アンヌ大修道院の左にある聖獣の池〔古代ユダヤで，神々に捧げる生贄を洗い清めるためにエルサレムの神殿近くに造られた池〕の位置が厳密に示されている）。

(4) この主題については多くの議論がなされてきた。エルサレムは全面的に破壊されたのであろうか。いくつかの地点においては，早い時期から徐々にまた人々が住むようにはならなかったのだろうか。ユダヤ人の歴史家ヨセフス〔フラウィウス・ヨセフス，37–100年頃。『ユダヤ戦記』の著者〕は，70年の攻囲戦に関して以下のように書いている。「今や遠征軍には虐殺し略奪する相手はいなかっ

た。〔……〕カイサルは全市と神殿を破壊し尽くすように命じた。ただし，塔のうちでもっとも高いもの，すなわちファサエロス，ヒッピコス，マリアムメの塔と，西側で都を囲っている城壁だけは残した。最後のものは（エルサレムに）残されることになる守備兵の陣営として活用するためであり，……都を囲む城壁の他の部分はすべて徹底的に破壊されて平らにならされた。その結果，将来人がそこを訪ねても，かつてそこに人が住んでいたと信じられるような痕跡はもはや何も残されなかった」〔フラティウス・ヨセフス，秦剛平訳『ユダヤ戦記　3』筑摩書房，2002年，107–8頁〕[14]。しかし，軍隊の入都は，〔エルサレム〕再建の大前提である。「（生きながらえた）不幸な老人たちは，灰燼と化した神域の近くに腰を下ろし，少数の女たちは敵の陵辱の餌食にされるために見張られている」〔同上，188頁〕。「このことが少なくとも示しているのは，エルサレムに入ることが当時のユダヤ人たちには禁じられてはいなかったということである」（VINCENT, p. 876）。アベルとヴァンサンの考えでは，70年の破壊の後でそこの住民を見捨てたエルサレムの教会と，135年のアエリア・カピトリナの設立後に建てられた教会との間で，「記憶の伝達が不可能」だと主張するのは非合理的である。なぜなら，70年から135年の間にそこに戻ってくる教会員たちもいたからである。

訳註

〔7〕 アルヴァックスはその記憶論において，「記憶」を表すフランス語として mémoire と souvenir という2つの語を使い分けている。両者の関係を図式的に整理すれば，mémoire は過去を souvenir として記銘・保持・想起する作用や力であり，souvenir は特に想起〔se souvenir〕という行為の局面において現れてくる過去の表象である。一方で，mémoire には作用や力に回収できないニュアンスもあり，晩年の『集合的記憶』において「集合的記憶〔mémoire collective〕」という言葉は，「連続した思考の流れ〔courants〕」〔小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社，1989年，88頁〕，すなわち「個々の記憶〔souvenir〕が集合した時間の流れ」という含意でも使用されている。

こうした mémoire の多義性を踏まえ，本訳では souvenir を基本的に「記憶」と訳し，mémoire については「記憶」や「記憶する力」など文脈に応じて訳語を変えて原語を併記することにする。両概念の使い分けについてのより詳しい説明は，金瑛『記憶の社会学とアルヴァックス』〔晃洋書房，2020年〕および金瑛訳「『記憶の社会的枠組み』結論（2）」〔京都大学大学院人間・環境学研究科社会システム研究刊行会『社会システム研究』第23号〕の「解題」部分を参照されたい。

なお，アン・ホワイトヘッドもジャック・デリダがフランス語の mémoire を単一の定義で捉えることの難しさを指摘したことに言及している。それは，女性形単数 une mémoire は「記憶力やその善し悪し」を指すのに対して，男性形単数の un mémoire が文書を，その複数形になると人生についての記述，回想録までを意味するからである〔アン・ホワイトヘッド，三村尚央訳『記憶をめぐる人文学』彩流社，2017年，18–19頁〕。

〔8〕 フランス語の localisation という語は，『記憶の社会的枠組み』〔鈴木智之訳，青弓社，2018年〕でも使用されており，そこでは「位置づけ」という訳語があてられている。「位置づけ」とは，特定の記憶がいつ・どこで起きた出来事に関するものなのかを認識する作用であり，推論〔raisonnement〕と深く関わる作用である。『記憶の社会的枠組み』においては，「位置づけ」は主に個人が想起を行う場面を中心に分析されていたが，本書では特定の場所をめぐって集団が行う「伝承」や「巡礼」との関連で「位置づけ」が論じられている。そのため，「出来事があったのが特定の場所であると位置づけること」という含意を込めて，本訳では localisation に「場所の特定」という場所を強調した訳語をあてている。

〔9〕 サント＝ブーヴ〔1804–1869年〕はロマン主義を代表するフランスの文芸評論家・小説家・詩人であり，エルネスト・ルナン〔1823–1892年〕はフランスの思想家・宗教学者である。ルナンが発表した『イエスの生涯』〔1863年〕は，広範な資料を駆使した実証主義的な宗教史の試みであり，超自然的な態度を排除する合理的世界観が論争を巻き起こすことにもなった。サント＝ブーヴの論

考〔《Vie de Jésus, par M. E. Renan》, in *Nouveaux Lundis*, 13 vol., Paris, 1879–95, 6, p. 9, d'abord publié dans constitutionnel, 7 septembre 1863〕は，当時ルナンに向けられていた批判の厳しさに対し，苦言を呈したものである。

〔10〕 伝承を「集合的信念〔croyances collectives〕」として研究するという発想は，師であるデュルケームの宗教論から着想を得たものだと思われる。デュルケームは『宗教生活の基本形態』において，表象と実践という2つの次元を対比させて宗教を論じているが，そこで重要になるのが「信念〔croyance〕」と「実践〔pratique〕」の対比である。

〔11〕 訳注〔7〕でも見たように，「流れ〔courants〕」という表現は，後の『集合的記憶』においても使用されている〔小関藤一郎訳，行路社，1989年，88頁〕。またデュルケームも，制度のような構造的事実とは生の結晶化の度合いが異なる社会的事実を表す言葉として，「潮流〔courants〕」という表現を用いている〔『社会学的方法の規準』講談社学術文庫，2018年，54頁〕。本訳では「潮流」ではなく「流れ」という訳語をあてている。

〔12〕 milieu はデュルケームの社会形態学の用語であり，「環境」と訳されることも多い。だが本訳では「環境〔environnement〕」と区別するために，「風土」の訳語をあてた。この概念については，前掲の『記憶の社会学とアルヴァックス』202–208頁も参照されたい〔なお，そこでは「場」という訳語をあてている〕。

〔13〕 アルヴァックスは1930年代から40年代にかけて，ソルボンヌ大学において集合心理学に関する一連の講義を行い，1944年にはコレージュ・ド・フランスの「集合心理学」教授に選出されている。コレージュ・ド・フランスでの講義はその後アルヴァックスがブーヘンヴァルト収容所に収容され死去したため実現しなかったが，ソルボンヌでの講義の記録がトマ・イルシュの編集によって出版されている〔Maurice Halbwachs, *La psychologie collective*, Flammarion, 2015〕。本書との関連で重要になるのは，集合心理学の対象である集合表象や集合意識を明確化するうえで，社会の物質的な形態を研究する社会形態学との連携が不可欠だとアルヴァックスが主張している点である。アルヴァックスの集合心理学については，金瑛「デュルケーム学派と心理学――デュルケームとアルヴァックスを中心に」〔『デュルケム社会学の成立と受容：ディシプリンとしての社会学を考えるために　平成27年度～平成30年度科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か：デュルケーム社会学を事例として」課題番号　15H03409　成果報告書』所収，http://hdl.handle.net/10935/5511, 2021年6月29日確認〕と，金瑛「フランス社会学と心理学――デュルケーム学派を中心に」〔『日仏社会学会年報』第31号，2020年，33–45頁〕も参照されたい。

〔14〕 秦剛平訳はギリシア語表記に倣っており，註の中の「カイサル」は「カエサル」〔César〕その人を指す。また，註の中の「ファサエロス，ヒッピコス，マリアムメの塔」はダン＝バハト，高橋正男訳『図説イェルサレムの歴史』〔東京書籍，1993年，32頁〕によれば，「ファサエル，ヒッピクス，マリアムネの塔」が慣用表記である旨が述べられている。

聖学院大学論叢　第 34 巻　第 1 号　2021 年

Maurice Halbwachs' "Introduction," *The Legendary Topography of the Gospels in the Holy Land*

Suzeri YOKOYAMA, Ei KIN, Hiroo YANAGIDA

Abstract

The paper presents a translation of the French sociologist Maurice Halbwachs' "Introduction," *The Legendary Topography of the Gospels in the Holy Land* from French to Japanese. This book is a positive study that Christian groups shared the framework of collective memories about the Holy Land. Although descriptions of the saint place of the New Testament and the literature are slightly different, the spatial framework remains the same, that is, they demonstrate the location of the saint place in the Holy Land.

Contrary to the large amount of Halbwachs' studies, very few of them are Japanese translations. Although this translation is partial, the study aims to become a part of the Japanese translation work.

Key words: Maurice Halbwachs, collective memory, Holy Land, Gospels, legendary topography

Maurice Halbwachs, l'《Introduction》, *La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte*

Suzeri YOKOYAMA, Ei KIN, Hiroo YANAGIDA

Abstrait

Dans cet article, nous traduisons en japonais l'《Introduction》, *La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte* par Maurice Halbwachs. Cette œuvre était une étude positive sur la mémoire collective en Terre sainte qui a été partagée par différents groupes chrétiens. Même si les descriptions des lieux saints entre le Nouveau Testament et les nombreuses littéraires divergent, il s'agit du même cadre spatial que celles utilisées en Terre sainte montre.

À la différence de beaucoup d'études par Halbwachs, il existe très peu d'œuvres ayant été traduites en japonais. Bien que la traduction ne soit que partielle, nous continuerons de travailler la traduction japonaise.

Mots-clés: Maurice Halbwachs, mémoire collective, Terre sainte, évangiles, topographie légendaire